

インクル

"Incl." by The Accessible Design Foundation of Japan (The Kyoyo-Hin Foundation)

The Periodical of Accessible Design

特集 新規事業

No. 105

2016(平成28)年 11月25日



目次 contents

- | | | | |
|---------------------------------------|----|------------------------------|----|
| ■ “とっておきのアイデア” コンテスト 表彰式開催 | 2 | ■ 障害のある子と地域社会 | 12 |
| ■ ベトナム・ハノイで共用品を展示 | 4 | ■ サンパウロで ISO / TC 173 の総会が開催 | 13 |
| ■ マイサイズ!あなたに合わせたモノ展 | 6 | ■ 識別用「家庭品点字シール」をリニューアル | 14 |
| ■ 「共用品講座」第95講「『新規事業』と共用品」 | 8 | ■ 「KURUMIRU」都庁広場にオープン | 15 |
| ■ 全国脳卒中者友の会との再会 | 9 | ■ 手で見る絵本「テルミ」200号発行! | 15 |
| ■ 左半身不随の一級建築士となった私から見た、
施設・モノ・サービス | 10 | ■ 新規事業を産む応用問題 | 16 |

目が見えない・見えにくい私だから考えついた

“とっておきのアイデア”コンテスト 表彰式開催

第11回視覚障害者向け総合イベントにて

平成28年11月1日、「サイトワールド2016」にて、第1回目の「見えない・見えにくい私だから考えついた」ととっておきのアイデア“コンテスト”の表彰式を開催しました。今回のコンテストでは、盲学校の部では47名、59作品、一般の部では76名、134作品の応募をいただきました。

このコンテストは、国内初、また世界でも初の「目が見えない・見えにくい人」からの「ととっておきのアイデア」募集ということもあり、応募してくださった皆様はイメージが湧きにくかったかと思いますが、かえってそれが想像の幅を広げたのではないかと思うほど、様々な分野への応募をいただきました。応募いただいたアイデアの傾向を分けると大きく三つの項目がありました。

1. 夢のあるもの（非現実的なものであるが、夢があり希



会場風景

望が持てるものなど）
2. 実現可能性があるもの（現実的であり、製品化が可能なもの、あるいは少しの工夫で製品化ができそうなものなど）
3. ユニークさや斬新さがあるもの

また分野としては、移動支援、衣服、医療機器、家電製品、玩具、光学機器、書籍、情報、食品、日用品、文房具、金融、住宅設備等にわたり、主催する私たちの想像をはるかに超えた作品がたくさん集まりました。

盲学校の部：最優秀賞

その中で今回最優秀賞に輝いたのは、盲学校の部では高知県立盲学校のチーム・ちっぼ家メンバー3人（山本麻琴さん、浅野拓朗さん、伊與田萌さん）が考えた「まがるもん」でした。



最優秀賞「まがるもん」

先端15センチ変形可動式白杖は、歩行中にグレーティングなどは、歩行中にグレーティングなど溝のあるところに来ると、白杖の先端を曲げて、好きな角度で固定することができます。普通の白杖は、石づきがグレーティングの溝にひっつかかってしましますが、「まがるもん」は、石づきが地面に垂直に接するため、グレーティングにはまりません。現在の白杖より安心して歩くこ



作品が出来上がるまでの苦勞を発表するチーム・ちっぼ家メンバー



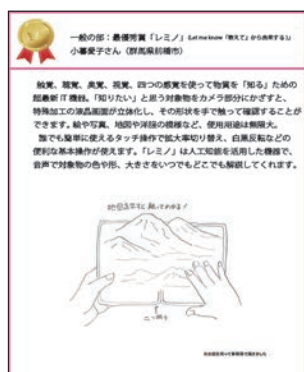
田中審査員長（左）とチーム・ちっぼ家メンバー山本さん、浅野さん、伊與田さん（右）

とができるものです。チーム一丸となって、友達と話し合い、プレゼンテーションを行い仕上げた作品は、情熱が感じられ、大変心地よく、温かい気持ちにさせてくれるものでした。

特集：新規事業

一般の部：最優秀賞

一般の部の最優秀賞は、小暮愛子さんの「レミノ (Let me know) 『教えて』に由来する)」でした。



最優秀賞「レミノ」

触覚、聴覚、臭覚、視覚、四つの感覚を使って物質を「知る」ための超最新IT機器。「知りたい」と思う対象物をカメラ部分にかざすと、特殊加工の液晶画面が立体化し、その形状を手で触って確認することができます。

絵や写真、地図や洋服の模様など、使用用途は無制限。誰でも簡単に使えるタッチ操作で拡大率切り替え、白黒反転などの便利な基本操作が使えます。これまで誰かを頼らなければ

理解できなかったものが、この機器を使って自分の力で理解できるようになるという希望を抱かせ、さらに自身の子供達の話が聞けるという、愛情にあふれた思いが伝わってくるものでした。

作品の選定に関わった審査員からは、「どの作品も大変良く、僅差であったため、受賞作品を選ぶことが大変だった」との感想がありました。

その中で入賞した作品は以下のとおりです。

盲学校の部

優秀賞 (2点)

- 「洗剤自動洗濯機」高橋宙生さん
- 「声でお知らせカップめん」古田桃香さん

入賞 (5点)

- 「でこぼこピアノ」酒井翔太さん
- 「日香さん」
- 「ゴミすいとり君」奥脇りんさん
- 「おしゃべりカラフル白杖」遠野希来々さん



田中審査員長(左)と小暮愛子さん(右)

「未来の歯ぶらし」岩本元気さん
「私だけのとっておきレンズ」香川県立盲学校高等部普通科3年生の皆さん

一般の部

優秀賞 (2点)

- 「折り畳み白杖用SOS発信フック」本間喜晴さん
- 「大腸がん検査用キット便利君」吉田重子さん

入賞 (5点)

- 「変身カメラ」福田勉さん
- 「チョイタッチ」内田多美子さん
- 「ビッグデータを活用した駅構内等公共施設の案内マップ」小高公聡さん
- 「もみあげの揃え方」益子良夫さん

「手帳型携帯墨字プリンター」栗川治さん

タイトルだけでもわくわくするようなものばかりです。入賞作品については、共用品推進機構のウェブサイトで紹介いたしますので、是非ご覧ください。

また、次回のアイデアコンテストでも、たくさんの方の素晴らしい作品に出会えることを楽しみにしています。

森川美和

【受賞作品ウェブサイト】

<http://kyouyouhin.org>

※このアイデアコンテストは、一般財団法人日本児童教育振興財団の協力を得て実施しました。



表彰式会場入口

ベトナム・ハノイの視覚障害者教育訓練センターにてイベント開催 ハノイで共用品を展示



視覚障害者教育訓練センター

共用品推進機構は、10月7、8日にハノイにある視覚障害者教育訓練センター（以下、センター）で、共用品と盲人用具の展示会を開催した。このセンターはベトナム盲人協会の傘下にある機関で、展示会では、共用品と、日本点字図書館で販売している視覚障害者をターゲットにした製品を展示した。展示会は、もう一つのイベント「ダイアログ・イン・ザ・ダーク（以下DID）」と同時開催された。日本でもDIDは常設会場で行われているが、今回のDIDは、



共用品の展示

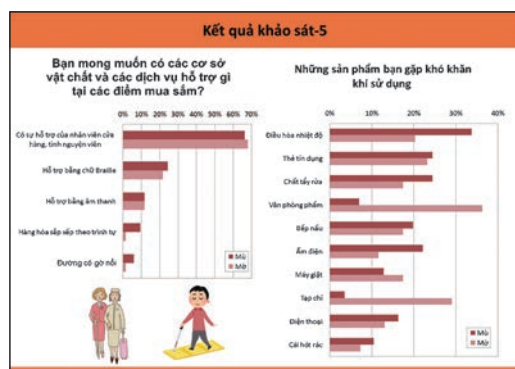
暗闇の中を視覚障害者のアテンションで歩き、視覚以外の触覚、聴覚などを使って、その場にあるものを当てていくものだった。そもそも展示会を行うことになったのは、ベトナム盲人協会と一緒に視覚障害者の不向き調査を行ったことがきっかけである。この展示会の開催が決まったとき、分かっていたのは、展示会開催地であるこのセンターの場所だけ。4月にハノイで打ち合わせを行い、センターの施設を見学しただけで、その後は、開催日程、展示する製品、センター

のどの部屋で展示するのか、メールと電話で話し合いを重ねていった。
展示会の主な来場者は、センターで研修を受けている学生、視覚に障害のある人やその家族、省庁、一般企業に勤務する人で、マスコミの取材もあった。日本製の製品、特に日本点字図書館の販売している製品については、ここで購入したいと言う人がたくさんいた。いくつかの製品は販売できたが、日本から販売用の製品を準備しておらず、希望に添えないこともあった。



会場内の様子

意外だったのが、展示している白杖がほしいという人がいたことだった。来場者が使っている白杖は、竹を切って白く塗り、もち手のところを赤くして持ちやすくした杖か、あるいは金属の棒だった。展示している白杖は軽い折りたたみ式で、もしも何かに白杖が引っかかっても、使用者が転ぶのではなく、白杖の方が折れやすくなっている。まだまだ、このような白杖は、ベトナムでは普及していないようだった。



ベトナムの不便さ調査結果

この展示会では、製品の展示と共に、ベトナムでの不便さ調査の結果のダイジェスト版を作成し、パネルで展示した。このような調査をベトナムで行ったことはなく、来場者の中には、すべての調査結果を知りたいという方もいた。

展示会の会期が決まり、順調に準備が進み、無事に開催日を迎えたように見えるかもしれないが、そこは海外での展示会、開催までは気を抜けないことが多くあった。大きな問題が起きたのが、製品の輸送である。ハノイの税関で、荷物が止まってしまったのである。製品のカタログの記載が適切ではなく、ベトナムの税関の検査で止められてしまい、徹底的に調べられてしまった。ベトナム盲人協会が何度も税関に赴き、書類を作成して対応してくれたおかげで、全製品にシールを貼られてしまったものの、展示会には間に合わせることができた。

共用品推進機構では、今後

他の海外の国でも展示会を行う計画を立てている。国によって文化や習慣の違いはあるが、その国に合わせて、柔軟に対応し、共用品を世界に広げていきたい。

かなまるじゅんこ
金丸淳子

ハノイ展示会同行記

日本点字図書館事業部長

かわしまさなえ
川島早苗

前段の通り、日本点字図書館事業部用具事業課（通称わくわく用具ショップ）の便利グッズ26点を選び、この2日間の展示会に同行し紹介してきた。

中でも、オリジナルの計量ポット（醤油差し・ワンプッシュ約5cc）は、小さな子供をかえる視覚障害の親にとって、薬用シロップ剤の計量という、本来とは全く違う使い方ではあるが、不便さの中の切実な需要があった。また、自動糸通し器のチャレンジに多くの盲学校の学生が興味を示した。この小

さな商品は、針の穴に糸を通すキツカケを作る一般の裁縫用品であるが、日常的に裁縫の経験のない彼らにとって、通訳がいるとはいえず、その仕組みを理解し、普段では諦めてしまうような困難な作業を打破するというチャレンジ精神に触発されたのか、何回もトライし競い合っていたのは忘れられない展開であった。困難に立ち向かう負けず嫌いなベトナムの若者がここにもたくさんいたのである。

糸通しに熱中する学生



もある。それは、当館の創立者ほんまかずお本間一夫が加藤善徳氏と欧米を視察し、かき集めてきた150点を日本初の海外盲人用具展示会を開催して紹介、全国の視覚障害当事者からの多くの熱烈な要望に、盲人用具の普及の必要性を見出し設立したのが始まりである。この記念の年に日本発信のこのような支援が実現に至ったのは、障害者に特化した商品ばかりではなく、ちょっとした工夫でみんなが便利に使えるものを作る取り組みや不便さ調査などの共用品推進機構の働きが、その起動力となったおかげである。この50年間で日本ができたことを彼の地でも普及する手立てを見つけたければと思った展示会であった。

マイサイズ！あなたに合わせたモノ展報告（第43回国際福祉機器展主催者特別企画コーナー）

2016年10月12日～14日の3日間、東京・有明の東京ビッグサイトで国際福祉機器展（H.C.R.）が開催され、共用品推進機構は、主催者特別企画である「高齢者・障害者等の生活支援用品コーナー」の企画・監修を行った。

このコーナーは特設会場内にあり、各出展社の展示スペースが決まった後、特設会場のスペースが決まることとなっている。本年は、各出展社が昨年度よりブースを広くしたことにより、本企画展示を行う特設会場のスペースを確保することが難しくなった。そのため、次年度に延期することなどを検討したが、以前行った「片手で使えるモノ展」のように特設会場の壁面を用いて展示することとなった。

テーマは「人に合わせる」

福祉機器には高齢者や障害のある人の生活を支援するためにさまざまな工夫がされている。「高さ」「太さ」「大きさ」「明るさ」「重さ」などを「使う人に合わせる」という工夫である。

また、本年4月に施行された障害者差別解消法では「合理的配慮」をしなければ、それは差別になるとしている。合理的配慮、すなわち「個別配慮」には「使う人に機器を合わせる」といったことが含まれてくる。

そこで本年は、福祉機器の特徴と障害者差別解消法の要素である「人に合わせる」をテーマとして「マイサイズ！あなたに合わせたモノ展」のタイトルで実施することとした。

展示製品

展示製品は主催者の一般財団法人保健福祉広報協会及び共用品推進機構で3つの選考基準に対応する製品を、H.C.R. 出展各社から20社35製品を抽出した。

・それぞれの人の「身体特性」に合ったそれぞれの製品

・それぞれの人の「感覚特性」に合ったそれぞれの製品

類似する製品はそれぞれ比較できるように、展示スペースを「衣」、「食」、「住」に分け、壁面には「趣旨パネル」と製品の選考基準を示した「展示製品の特徴パネル」を3つ掲示した（左ページパネルA、B、C）。

「衣」の製品

面ファスナーによって甲の高さに調節ができる靴、むくみなどで左右の足の大きさが異なる方のために、片足ずつでも購入ができる靴、ズボンのウエストゴムにボタンとボタンホールがあり、位置を付けかえてサイズ調節ができるパ

「食」の製品

自身の手に合わせられるように首元や持ち手部分が曲げられる、または、持ち手部分を温めると柔らかくなり、曲げることができるスプーン・フォーク、細いものを太くして握りやすくするシリコングリップや樹脂、サイズの異なる

ジャマなど。

**高齢者・障害者等の生活支援用品コーナー
～マイサイズ！あなたに合わせたモノ展～**

【マイサイズ！あなたに合わせたモノ展】では、三つのポイントから、マイサイズをご紹介します。

1. それぞれの人に合わせられるモノ
2. それぞれの人の身体特性に合ったそれぞれのモノ
3. それぞれの人の感覚特性に合ったそれぞれのモノ

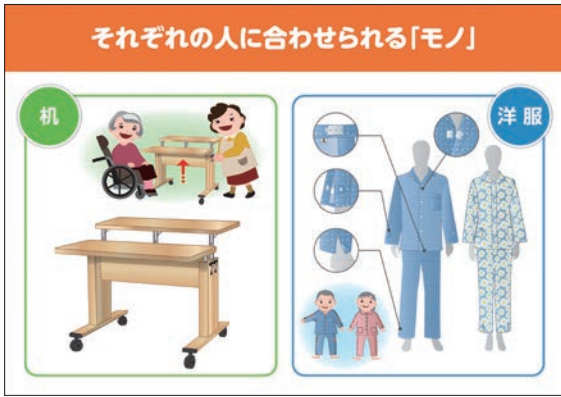
これまでのモノづくりの多くは、「モノに合わせる」ことが多かったのですが、これからのモノづくりは、「モノをあなたに合わせる」ことが大切になってきます。どんな小さなモノでも、マイサイズが見つかると思えるものです。

あなたのマイサイズはどのようなものですか？
また、みんなに紹介したいマイサイズがありましたら教えて下さい。

主催：一般財団法人 保健福祉広報協会 / 企画監修：公益財団法人 共用品推進機構



趣旨パネル



パネルA

お椀、押した分だけ出てくる調味料入れなど。
「住」の製品
 左右どちらの手でも使うことができ、置いてでも使うことができるハサミ、柄の長さを変えられる浴室クリナー、検温結果を音声で知らせる体温計や高い音と低い音を交互に鳴らして知らせる体温計、2つの天面の高さを別々に調節できるテーブル、など。



パネルB

来場者の声
 ・各出展社のブースに行けば購入できるのか。
 ・パネルが見やすくてとても良い！
 ・製品同士を比較できるのがすごく良い。
 ・日常生活で一番使うものが置いてあるのがとても良い。
 ・出展社ブースに行かなくても、このブースだけで十分だ！
 ・スペースを縮小した展示となったが、来場者は途切れることなく、たくさんの方々から好評の声を聞いた。

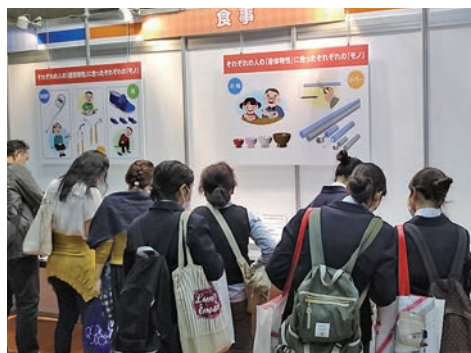


パネルC

ただいた。また、日常生活でよく使う製品を多く展示していたためか、「手が不自由なのでボタンかけを探している」、「だんだん高齢になり、ペットボトルを開けるのが困難なので、開けやすくなるオープンナーを探している」、「リウマチで関節が動きにくくなってるので補助するモノが欲しい」など展示製品以外の要望や質問も多かった。
 障害者差別解消法をうけての企画となったが、来場者の要望は毎年変わらず、自身に合うマイサイズを探すことと感じた。



会場の様子



ズを探すことと感じた。
 この障害者差別解消法によって、それぞれの人に合うマイサイズの製品が、世の中により多く広まることを願う次第である。

たくぼともかず
 田窪友和



後藤芳一（ごとう・よしかず）
日本福祉大学客員教授（東京大学
大学院教授）1995～98年経済産
業省医療・福祉機器産業室長（初
代）、同大臣官房審議官（製産業局
担当）を経て2012年から東京大。
日本福祉大は1999年から兼任。
著書「共用品という思想」ほか。

新規事業には、開発・提供する商品・サービス

の用語が本講の第1～94講に既出であることを示す）や事業

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

に分けられる。その結果、6通り（①3（形態）×2（製品の新規性））になる。

福祉用具の分野で事例をみよう。自動車部品メーカーが介護

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

市場の新しいさで考える視点もある。製品市場それぞれについて既存／新規があるので組合せは4つになる。①市場浸透（製品⇨既存市場⇨既存）⇨既存市場で競争力を高める、②製品開発（製品⇨新規市場⇨既存）⇨新製品の開発や商品ラインの充実を行う、③市場開拓（製品⇨既存市場⇨新規）⇨今ある製品を新しい顧客へ展開したり、新しい市場を創造する、④多角化（製品⇨新規市場⇨既存⇨製品⇨市場）⇨市場ともに新しいため、大きい成長機会になるがリスクも大きい。

福祉用具の事例は、徳武産業の介護用シューズ「あゆみ」の片足販売や左右サイズ違いの提供

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

起点に新規事業を考える際に利用され、提唱者の名前からアンゾフの成長ベクトルといわれる。

3. 共用品の発展との対応
福祉用具―共用品―一般製品は、その性格と発展の経緯から「専用福祉用具（Ⅰ）」「共用福祉用具（Ⅱ）」「共用設計製品（Ⅲ）」「バリア解消製品（Ⅳ）」「ユースフル製品（Ⅴ）」「健常者専用製品（Ⅵ）」に分けられる（共用品の市場規模⇨Ⅱ+Ⅲ+Ⅳで共用品推進機構が公表している）。

共用品の事例は、温水洗浄便座（Ⅱ）、シャンプー容器のぎざぎざ

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

全国脳卒中者友の会との再会

2016年10月23日、横須賀市にある神奈川県立保健福祉大学の講堂には、多くの脳卒中の人たちと家族及び関係者が集まった。

NPO法人脳卒中者友の会が主催する第14回目の「全国脳卒中者の集い」に集まった人たちである。

この催しが行われるのを知ったのは1か月前、友の会の理事長、石川敏一いしかわとしかずさんのご自宅をたずねた時である。

共用品推進機構では、一昨年から、今まで不便さ調査を行っていた対象障害に加えて、がんや認知症の人たちの団体と「良かったこと調査」を始めた。さらに難病などの団体とも交流をもちながら、共用品、共用サービスの幅を広げようとしている一環での訪問であった。また、2012年に国際福祉機器展で行った「片手で使えるモノ展」でも、脳卒中で片マヒになった人たちが多くきてくれ、その発展も考えたいと思っていたとい

うこともあって、ホームページで友の会の存在を知り、石川さんに直接連絡したのである。

電話をすると、15回目くらいのコールで、「はい、石川です」とはつきりした声が返ってきた。「はじめまして、共用品推進機構の星川ほしかわです」と、やや緊張しながら話し始めようとする中、「星川さん！はじめましてじゃないよ。私は、共用品推進機構の前身のE&Cプロジェクトの人たちと、何度も会議をして片手で使えるモノの普及を検討していたんですよ」との返事。思いがけない再会であった。

脳卒中の人たちが、日常生活で不便を感じていることや、便利なモノとか良かったことなど、会として調査をしたことがあるかを聞いたところ、「制度などに関するアンケートはしてきているが、日常生活で使うモノやコトに関しては、まだしたことがない。良かったら、私の自宅に来たら、どんなことが不

便で、どんな工夫をしているかを見せることができる」と言われ、訪問したのである。

石川さんが住む集合住宅のベールを押すと、「はい」との答えから時間をかけて玄関まできた石川さんが鍵をあけてくれた。扉をあけると目に飛び込んできたのは、天井から床まで棒がランダムに立っている光景であった。しかし、ランダムに立っていると思つた棒は、試行錯誤を重ね、室内の移動に必要な位置とが分かった。備え付けの家具も、その家具本来の収納という役割だけでなく、移動補助具としての役割を担っていることが分かる。

長距離トラックの運転手をしていた石川さんは、根っからの仕事好き。昼間のトラックを終えると、タクシー運転手、そして組合活動とまさしく昼夜なく働いていた40代前半、脳梗塞になつて倒れ、そこからのリハビリでの苦闘、そして会の立ち上

げまでをノンストップで話してくれた。

その後、片手でできるようになつたさまざまな技を披露してくれた。「片手のみ伴奏付きのハーモニカ演奏」、「麻痺していない方の指の爪を、市販の爪切りで切る技」などを披露してもらうと、あつと言う間に3時間が過ぎていた。そして冒頭の大参加となつたのである。

大会では、石川さんと見事な連携をされている医師、長谷川幹先生みきのコーディネートのもと、脳梗塞、脳出血、くも膜下出血の人たちの生の話を聞くことができた。

共用品と脳卒中、どう発展させていけるか、今から楽しみである。

星川安之ほしかわやすゆき



情報誌「あゆみの友」
(脳卒中者友の会)

左半身不随の一級建築士となった私から見た、施設・モノ・サービス

生活環境・企画設計工房 代表 もりやま まさよし 森山 政与志

原点

出前はラーメンでも嬉しかった。病気になる前と卵丼をとった。それが親子丼になると異様な気配を感じカツ丼になると、もうダメかと子供心に観念した。それでも食べると美味しく美味くて、死んでもいいやと思った。田舎の食堂はラーメンも丼物も寿司もカレーライスもと何でもあったので、お爺ちゃん、お婆ちゃん、お孫さんが連れ立って、好きな物が仲良く食べられた。

例えば、田舎の食堂や菓子パンもあった八百屋さんなどが、自分にとってのユニバーサルデザインの原点だったように思える。それらの店があった商店街はシャッター街に変わり、国道沿いの大型チェーン店が賑わう。



ウサギからカメの今

施設

右手で杖を握ると傘が持てない。濡れながら歩いていると気が落ち込む事を知った。怖かったのは、健常者時代の最後の仕事であった「さいたま新都心のペDESTリアンデッキの上で突風に飛ばされて倒れた時のことである。

高層ビルの足元や車道と歩道の間などに、万が一の際に掴まる外部手摺の必要性を健常者の頃には気づかなかった。

その外部手摺は腐食等を考慮するとステンレス製が多い。それを握ると夏は暑くて火傷、冬は冷くて凍傷しそうになる。右手一本で運転するハンドルにつけた握り玉も、夏は暑くて握れない事がある。



横断歩道が渡れない時がある

横断歩道の前で立ち止まり、青信号と同時に歩き始めても渡り切

れない事がある。気にもしなかった、幅が広い道路の中央分離帯の意味が分かった。

エレベーターホールでは、急に点滅されても運悪く端に立っていると間に合わない。障害者用があるが、出社時にゾーン分けすると階数によっては使えないので私は人荷用エレベーターを使うようになった。

トイレは、扉無しは少なく室内側に開く内開きが多い。身体ごと体重をのせて開けたり、出る人が引いた扉を掴んでいると身体がもつてゆかれて倒れそうになる。

華やいだ場にあるトイレの扉をデザインする際に、片腕しか使えない人や、お年寄りの皆様が使え易い重量か、重くなったら開けやすい扉金具の選定に配慮する等の必要性の意識が乏しかった。

街を歩いていると開けっぱなしのお洒落な外開きの強化ガラス扉を見る事がある。そこには「重くて開け辛い為…。お客様

は通行にご注意下さい」と書いてある。

モノ

私の場合、幸いにも利き腕の右手が動く。麻痺して動かない左手の思いがけない役割の一つが、モノを押さえて動かないようにすることだった。

ペットボトルや缶ビールは押さえられないので、右手で空けるのが難しい。今は蓋を歯で固定し右手でボトルを回している。好きな納豆も掻きまぜられないので外では頼まなくなった。

逆立ちしてもワイシャツの右袖ボタンは留められず、右手の爪は切れない。ワイシャツのボタンも上から順に右手一本で止めるしかない。朝、急ぐ時ほど掛け違い、最後のボタンが合わない事が多かった。

それらが一人でも出来るモノが製品化される事を願うと共に、私はどうしても出来なくなった事を周囲の皆様にお願ひする道を選んだ。

【森山氏プロフィール】

1950 (S25) 年、新潟県生れ。1969 (S44) 年、18 歳で郵政省 (現:日本郵政株式会社) 建築部にノンキャリアで入省。東京、沖縄、北陸三県等で勤務。1999 (H11) 年、49 歳で障害者、翌年の 2000 (H12) 年に復職。2016 (H28) 年、65 歳で退職、47 年間の勤務を終える。同年、特に左半身不随の一級建築士となった 17 年余りの知識を役立てるべく埼玉県 UD 推進アドバイザーを務めると共に、任意組織「生活環境・企画設計工房」を設立。

いだらうと感じている。それと問題は靴だった。麻痺した左足にプラスチック短下肢装具 (以下、装具) を付けている。それを入れるのに必要な機能と大きさが靴に求められる。なんとかスーツに似合う靴を探したが驚くほど高価だった。右



丁寧をお願いする

復職が梅雨時で、50 歳の誕生日を迎える一週間前だった。傘がさせない

ので雨合羽を探した。ビニル製の薄手のものでは心配で、方々探しまくった。最後に行き着いたのがスタジアムジャンパーで、全身が包まれたが通勤にはどうかと迷った。やっと気に入ったものを見つけたが風が吹くと頭を覆うフードが外れて、肝心な時に役に立たない。機能的でお洒落な雨合羽は殆どない。雨の中で、車椅子利用者の方々を見かけると、同じ思いだろうと感じている。

は普通サイズで良いが、ばら売りに出来ないという。仕方なく左用の大きめのサイズを買い右足をならした。そんな靴も二年前に製造中止。今は残った靴を修理しながら使っているが、いずれ使えなくなる。

サービス

旅館等では、座らないと靴が脱げないので、玄関には椅子が欲しい。踏み込みに置くと脱いだ装具付きの左足と右足で其処を歩くので、汚れを付けたまま絨毯敷や畳敷のホールに上がることになる。また、椅子をホール上に置くと汚れた靴で上がると思っている。



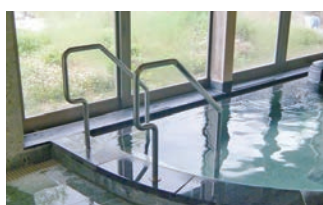
忘れられない椅子「にしん御殿小樽貴賓館」にて

ある時、後脚を短く切って調整した椅子が踏み込みとホールにまがたって何

気なく置かれていた。ちょっとしたアイデアだが麻痺した左手を右手で叩き拍手した。その事を何度も紹介しているが、今も忘れられない。靴は履き替えても杖はそのままの事が多い。雨の日など先端の汚れが気になる。車椅子利用者の方々も両輪について外の汚れが気になって

いるのではと思う。何気なく「お拭きしましょうか」と笑顔で迎えてくれる仲居さんが居たら、笑顔以上のおもてなしの心を感じる仲間が多いと思う。

左半身不随の私は、手摺付きの温泉にしか入れない。だが、驚くほど湯船に手摺が無い。旅館の温泉全部に望む訳では無く、一か所位は入りたい。



もの言わぬサービス

合がある。たとえ手摺が付いていても大浴場に入れないので家族風呂のニーズ

が案外高い事を知った。個室露天風呂も手摺が無く、湯船までが高すぎて入れない事がある。手摺は単純な施設整備では無く、もの言わぬサービスかもしれない。

寛容で骨太な精神

切符売り場で小銭を探していると「早くしろ」等の罵声を浴びることがあった。「もっと不自由な方々への思いやり」をと、訴える講師の方もいるがラッシュ時に悪気があって言った訳でもないかも知れない。過剰に受け止め過ぎたら街に出られなくなる。施設整備や気遣いを求めるだけでなく残された能力に感謝して一つでも出来る事を増やしたり、寛容で骨太な精神を養う事も必要だと思いついた。

17 年余りが経った。突然の発病や事故は誰にでも起こりうる。「自分だけが特別では無い」と、今は思えるようになった。

障害のある子と地域社会

よしたけ
吉竹ことみ

娘の障害に直面して

現在8歳の娘美乃里は、生後10カ月の時に点頭てんかんを発症しました。検査の結果は、15番染色体異常。食べられない状態が続き、2歳で胃ろうを造設。娘の看護と、娘の病を受け入れることに苦しむ夫のサポートに追われる日々でした。

娘は、常時医療的ケアが必要であつたため、地域の障害児発達センターに入園できず、車で40分ほどの都立の療育園に通いました。常時付き添いが必要なため、ほとんどの方が仕事を辞めています。同じ境遇の友人に恵まれ、母親として療育されたと感じた、大切な時間でした。

夫の転勤で1年程過ごした大阪では、療育園を経て地域の普通幼稚園・保育園へと転園する制度がありました。医療的ケアが必要な子どもも、看護師が常駐する公立

保育園へと転園します。そして、普通小学校へと進むのです。

大阪でそういう例を見ていて、地域のつながりの大切さを痛感していたことから、娘の場合も教育委員会に地域の学校への通学を希望しました。現在は、特別支援学校に通いながら週に2度、普通学校に通っています。

子どもの反応は正直

東京では、医療的ケアが必要な子どもの場合、療育園から特別支援学校へ、そして多くの場合施設への通所となり、生涯、一般社会に交じることがほとんどありません。けれど、たとえ一時でも、地域に住む同じ年齢の子どもたちとの交流は、望ましいことと思うのです。

多くの子どもたちにとって、娘との出会いが障害児に接する初めての経験でした。そのため、入学

時には、娘を怖がる子ども、手が触れただけで気持ち悪そうにしている子どもいました。「どうしてこんなに小さいの?」「どうして病気になるっちゃったの?」と質問攻めです。

しかし、少しずつ受け入れ、何もできない娘をかわいく思ってくれるようでした。同級生がよだれを拭き、靴を履かせるなど、積極的に手伝ってくれます。散歩中に「あの子は美乃里ちゃんね、ベビーカーに見えるけどあれは車いすでね」と、自分の親に一生懸命説明してくれたこともありました。

ともに生きるために

特別支援学校を卒業してから、娘の生活基盤は地域になります。たとえば震災の時、あるいは親が年老いた時、公園やスーパーで、娘のことを知り声をかけてくれる



娘の美乃里、クラスメイトと

「味方」がほしい。それは娘の人生にとって、何よりの財産になると思うのです。そういう障害者や弱者が住みやすい地域は、どんな人にも住みやすい地域ではないでしょうか。

ブラジル・サンパウロでISO/TC173及びISO/SC7の総会が開催

— 2016年9月13日から16日 —

2016年9月13日から16日までブラジル・サンパウロのFaculdade Zumbi dos Palmares

(私立大学)においてISO/TC173 (国際標準化機構/福祉用具専門委員会) 及びISO/TC173/SC7 (アクセシブルデザイン分科委員会) の総会が開催された。

ISO/TC173/SC7の総会は日本が主催したもので、9月13日の1日だけ行われ、スウェーデン、韓国、ブラジルのエキスパート(専門家)、ISO中央事務局が参加し、全部で4か国、10名での会議となった。会議ではSC7の活動報告、WG(作業グループ)の報告を行い、提案予定である「視覚障害者のための取扱説明書」、「消費生活用製品のアクセシビリティ評価」、「障害のある人々と高齢者の不便さ調査」について説明した。次回

の会議は今回と同様に、ISO/TC173の総会と合わせて開催することが決定された。

ISO/TC173の総会は9月14日に開催され、その後の2日間はセミナーが開催された。総会には9か国、22名が参加し、TC173傘下のSC(分科委員会)とWGが発表を行った。TC173とSCの適用範囲とタイトルを含むビジネスプランの検討をCAG(議長諮問グループ)で開始することが決定された。次回会議については2017年に開催する案も検討されたが、最終的には



TC173 総会の様子

2018年にケニアで開催することが決定した。この会議で南アフリカの参加者からSC7のエキスパートを確保したので今後のSC7の活動に参加する、との連絡を受けた。喜ばしいことなので、今後の活動に期待したい。

15日のセミナー1日目は、TC173議長から「ISO/TC173の将来の業務について」、ISO中央事務局から「ISOの2016-2020の発展途上国に対する行動計画」、世界保健機関から「50の優先度の高い補助具—規格が必要か?」、ブラジル技術規格協会から「福祉用具の規格に関する市場に対する評価の可能性」、ケニア標準局から「ケニアにおける障害者のための福祉用具に関する法制と規格の状況」についての発表があった。

2日目のセミナーでは、スウェーデン規格協会から「IS

O15621 (尿吸収補助具—評価に関する一般的指針) の北欧での実施例」、ブラジルから「Quebec 2.0 福祉用具の満足度調査」の発表があった。それに続き、私が「アクセシブルデザイン」と題して「アクセシブルデザインのとは?」、「日本の共用品—市場規模調査と不便さ調査」、「ISO/TC173/SC7について」、「SC7で提案予定の前述の3件」について発表を行った。ケニア、オーストラリア、ISO中央事務局から良い発表であったとの意見をもらうことができ、意義のある発表となった。最後にアメリカから「車椅子専門家の国際社会における業績」についての発表が行われ、全日程が終了した。

まつおかこういち
松岡光一

識別用「家庭品点字シール」をリニューアル（花王株式会社）

花王は2001年、社会貢献活動の一環として、視覚障害のある方に向けて「家庭品点字シール」（墨字入り）を作成、提供してきたが、2016年11月にこれらの点字シールをリニューアル、無料提供を開始した。

ヒアリングでニーズ把握

リニューアルにあたり、花王の社員が視覚障害のある方々の自宅に訪問し、日常生活の様子や、点字シールを使用する場面や必要な製品を想定して、実際に使用してもらいながらヒアリングを行った。

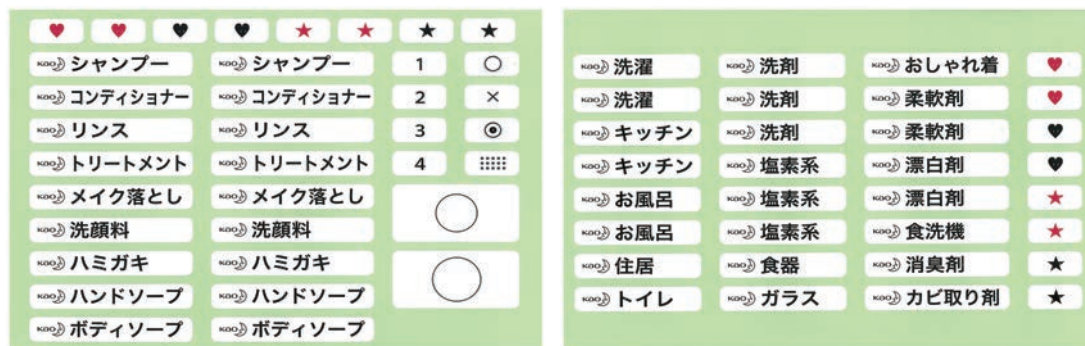
ヒアリングでは、「置き場が同じで形が似ているものに貼りたい」、「商品のデザインを損なわないシールがいい」、「読みたい情報を隠さない位置に貼りたい」などの意見が聞かれた。

これらの意見を反映し作成した点字シールは全部で38種類。



点字シールを貼った製品

洗濯や掃除の製品に貼るものと、身体まわりの製品に使用するもの2枚が1セットになっている。区別のつきにくい容器や詰め替え容器に貼ったり、取扱いに注意が必要なモノに貼ったり、使用場面に応じて貼ったり、また組み合わせたりと、様々なアレンジができる。さらに今回は、ヒアリングで要望の多かった、「自由に貼ることができるシール（星やハート、数字や記号、色など）」が追加され、識別すること自体が楽しくなる工夫がある。



10種類から38種類に増え、アレンジして使える

多くの人に分かりやすく、安全に

リニューアルに至った背景には、最初の提供から十数年経ち、製品の種類が増えたこと、コンパクト化が進んだこと、さらに安全性への意識が高まったことがある。同社社会貢献部の高内美和部長は、「今後も視覚障害のある方が便利に、より安全に日常生活を送って頂けるように取り組んでいきたい」と話す。

この点字シールは弱視の人達にも配慮して作られているため、字体や大きさがとても見やすい。視覚障害のある人達だけでなく、高齢者をはじめ、より多くの人にとっても使いやすいシールといえそう

森川美和

【点字シールの申し込み先】

花王（株）コーポレートコミュニケーション
 ション部門 社会貢献部
 電話：03-3660-7057
 ファクス：03-3660-7994
 メール：kouho@kao.co.jp

「KURUMIRU」都庁 広場にオープン

本年9月、東京都庁都民広場地下1階に、「KURUMIRU」という名前の雑貨店がオープンした。店内の商品は、都内121の就労継続支援B型事業所で働く、障害のある人たちによって作られている。店名には、「くる」ことでお客さまに商品に触れてもらい、「みる」ことで作り手たちのこだわりを感じてほしい、との思いが込められている。

都では、昨年9月から障害者福祉施設で作られる自主製品に関する情報を広く伝える「自主製品魅力発信プロジェクト」をスタート。その事業の一環で今回オープンした「KURUMIRU」を常設店として設置する準備を進め、多くの人に自主製品を知ってもらい、購入してもらうためには、一般市場の商品と肩を並べられる商品であることが必要であると考えた。そのため、店舗に参加希望の各事業所に対し、「安全面での

試験が行われているか?」、「原材料などの表示は正しくされているか?」などのチェックと共に、「お客様の購買意欲を意識した色使いか?」、「手に取りたくなるパッケージデザインか?」などのチェック基準を設け、さらに販売の専門家のアドバイスを受けられるようにした。

販売員は、一般の雑貨店での経験を持つプロが担当する。

障害のある作るプロと、雑貨販売の実績のある販売するプロとの連携という新たな体制によって、正当に社会の評価を受け、多くの場所に「KURUMIRU」の思想と商品が広がることを楽しみにしている。

KURUMIRU



KURUMIRU 店内

手で見る絵本『テルミ』 200号発行!

手で見る学習絵本『テルミ』が、創刊200号を迎えました。『テルミ』は目の不自由な子どもたちのための「手で見る」触察絵本。点字だけでなく、触察できるイラストがあり、触って読んで楽しむことができます。晴眼者の方と一緒に楽しめるよう、墨字(活字)も併用しています。一般財団法人日本児童教育振興財団が年6回、偶数月に発行し、全国の盲学校にも送付されています。

200号発行を記念して、10月19日に、「テルミ200号記念感謝の会」が開催されました。これまで発行に携わってこられた出版、編集、点字製作の方々に参加されましたが、発行当時は、点字印刷がうまくできなかったことや、編集での苦労話なども話をされました。来場者も時には涙しながら話に聞き入り、この本に対する思い入れの深さが伺えました。

この『テルミ』、先日、海の向

このハノイで開催された展示会でも、来場者には大人気でした。点字は日本語で読めないようでしたが、パズルや触図は世界共通なのです。

目の見えない子どもたちが楽しみにしているこの『テルミ』、感謝の会で300号を目指そうという方もいて、ますます面白い絵本になりそうです。



手で見る触察絵本『テルミ』(日本児童教育振興財団)

新規事業を産む応用問題

【事務局長だより】
星川安之

中学・高校時代、好きな科目は数学、特に応用問題が好きだった。学生時代、東京世田谷の三宿にある重複障害のある子ども達の通所施設に何か手伝えることはないかと通っていた。ある日保母さんが「この子ども達は、市販のおもちゃではほとんど遊べない」と、ぼそっと言った言葉が、数学の応用問題のように聞こえた。

学生時代に出された応用問題との違いは、もしもその問題が解けても答えの提出先が決まっていないことと、それを解くための参考書がどこにも売られていないことだった。

運よくおもちゃメーカーに就職することができ、入社半年後に「応用問題」を解くための部署が新設され、その2年後にICチップを入れ少し振動を与えると30秒間メロディが鳴り、目の不自由な子どもが探すことのできるボールが市販された。応用問題の答えを製品化という形で提出できたと思ったら、それはそれから次々と出される多数の応用問題の一つにすぎないことが分かった。それが分かったのは、自分に出された応用問題を、少し遠くから眺めた時である。

遊べない、使えない人がいるのは、おもちゃだけではなかった。それを意味する単語もなかった「障害の有無に関わりなく使えるモノやサービス（共用品・共用サービス）」に、複数の企業や福祉関係に所属する人が取り組んでいることを知り、ゆるやかな繋がりでの勉強会が発足した。その勉強会は、障害

のある人たちへの「不便さ調査」という新たな事業を作りだした。

視覚障害から始まった調査は、聴覚障害、車椅子使用者、高齢者へと発展、さらに3年前からはベトナム、インドネシア、ミャンマーへも広がり、多くの人の情報共有ツールとなることが分かった。不便さ調査は、例えると「道に穴があいている」ことを指摘するもので、「道を平らにする」ことがゴールであった。そのため、その道が、もっと歩きやすい、もっと走りやすい道になるツールではないことも分かってきた。

この応用問題には、「よかったこと調査」を、異なる障害の当事者団体と共同で行うことによって、その答えの一つを提出した。

しかし、不便さ調査も良かったこと調査も、既にできあがったモノやコトがその対象であるため、障害のある人たちにとっては「受身」である。ここで出た応用問題は、「能動的にするには？」であった。

そしてその一つの回答が今回行った「見えない、見えづらい私だから思いついた“とっておきのアイディア”コンテスト」である。

最初の応用問題が出されてから約40年がたとうとしているが、いっこうに、出題が終わる気配がない。ただし、40年前との一番の違いは、回答する人の数が桁違いに多くなっていることである。



共用品通信

【イベント】

ベトナム 視覚障害者教育訓練センターで共用品を展示
(10月7～8日)

第43回国際福祉機器展(10月12～14日)

【会議】

第1回消費生活用製品の音声案内 JIS 検討委員会(9月6日)

とっておきのアイディアコンテスト審査会(9月27日)

第1回操作性に関わる規格検討親委員会(9月29日)

第1回家電製品等良かったこと調査委員会(10月17日)

第2回「取扱説明書(情報)」JIS 原案検討委員会(10月18日)

第2回「取扱説明書(情報)」国際規格原案検討委員会(同日)

第1回アクセシビリティ一般要求事項原案作成委員会
(10月24日)

第1回 TC159 国内検討 WG 委員会(10月25日)

第2回消費生活用製品の音声案内 JIS 検討委員会(10月31日)

【講義・講演】

東京都港区芝浦小学校共用品授業(9月9日、森川)

千葉県広域専門指導員向け講演(9月24日、森川)

新潟県糸魚川高校共用品講座(10月5日、森川)

シニアライフコーディネーター養成講座(10月15日、星川)

八王子市立山田小学校共用品授業(10月21日、森川)

アクセシブルデザインの総合情報誌 第105号

2016(平成28)年11月25日発行

"Incl." vol.16 no.105

The Accessible Design Foundation of Japan
(The Kyoyo-Hin Foundation), 2016

隔月刊、奇数月に発行

一般頒価 1部 1000円

(但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています)

編集・発行(公財)共用品推進機構

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル2F

電話:03-5280-0020

ファクス:03-5280-2373

Eメール:jimukyoku@kyoyohin.org

ホームページ URL: http://kyoyohin.org/

発行人 富山幹太郎

編集長 山川良子

事務局 星川安之、森川美和、金丸淳子、松岡光一、田窪友和

執筆 川島早苗、後藤芳一、森山政与志、吉竹こども

デザイン 関戸菜美

写真 白岡直子(表紙)

表紙写真 サイトワールド2016にて撮影

編集・印刷・製本 サンパートナーズ(株)

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、共用品推進機構までご連絡ください。

上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。